

保育の原点を案内する一冊

— 『新しく生きる』を読む —

宮下美智代

津守真先生が『幼児の教育』の編集に長く携わってこられたことは、皆さんご存じであろう。本誌に寄稿された津守先生の連載を基に研究者や保育者たちが語り合っている『新しく生きる』（津守真・浜口順子編 フレーベル館 二〇〇九年）が刊行された。

私が大学時代にお世話になった津守先生の授業を、いま一度受けてみたいと思っていれば、それに「はい、どうぞ」と応えてくれるように『新しく生きる』が出版された。

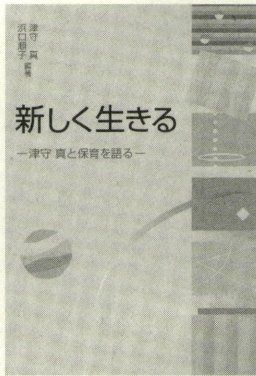
私が読みすすめたままに、順に見ていこう。

第2章「子どもの成長」の中の「天国からの種」

から。愛育養護学校を小学六年生で卒業する子ども
の母親が、パウロの言葉をひいて校長の津守先生に
次のように言ったという話が紹介されている。「私た
ちは知っているのです。苦難（トラブル）は忍耐を、
忍耐は練達（経験）を、練達は希望を生むというこ
とを、希望は私たちを欺くことはありません。」

私たちはさまざまな問題の中で生きている。津守
先生は病を乗りこえられ『新しく生きる』と題して
本を出されている。私も希望をもち、新しく生きた
いと心から思う。幼児教育にかかわるものは、こう





と過ごすかかわりの大切さを教えてくれる。このころも読むたびに発見がある。

いうひそやかなものを頼りに、それぞれの仕事をやり続けていくのではないだろうか。

「世界はよい方向に向かって前進していると子どもが感じるようにするのはどうしたらいいだろうか。」この津守先生の言葉から強い思いが伝わってくる。津守先生の平和への希求、切望はずっと続いている。私たちこそ、それを受け継ぎながら保育に向かわねば。

津守先生の「天国からの種」と「五歳児への成長」という文章を受けて、お茶の水女子大学附属幼稚園の宮里さんが「子どもが始めたことを大事にするということ」と題して日常の事例をあげつつ、子ども

昭和四十二年、私は大学を卒業して祖父母が住む長野県の本曾で就職した。創立四十五年目を迎えた古い小さな幼稚園。東京で資格を得てこの地に嫁いできた祖母が、大正時代に設立した幼稚園であった。

その当時の日本は高度経済成長へと向かう最中で、保育者の募集もままならぬ時代であり、目に見える結果主義がまかりとおる世相の中、「今日Aちゃんがこんなことをして……」と喜びながらも、時には先が見えなくなり立ち止まることもあった。

私は考えた末、『幼児の教育』を教職員に一人一冊買ってもらい読むことにした。輪読会を週一回もつよう努めたのである。子どもを語る時、多面的なとらえ方はむろん大切であるが、共通の地平に立ちたいものである。この輪読会を重ねるうち『幼児の教育』によって光が差し込まれ、職場の学び合いができるようになった。事情あって五十余年経て、祖母の幼稚園に公立化の道が開き新生した時には、初めて幼稚園とかかわる教育委員会の事務局の方々に

も『幼児の教育』を勧め、幼稚園、幼児教育の理解を新しくしていただいたこともある。

木曾幼稚園の遊びの中に音楽やリズムを取り入れていき、子どもたちが半年にわたる「海賊たちと宝島ごっこ」が展開した事例を、教育課程全国研究会で長野県から発表したことがある。なんとその時の記念講演が津守先生で、題目は「保育の一日と人間の成長」であった。自発性、矛盾の肯定、自我の成長、人間を育てる保育などについて語られた。津守先生が私たちの保育を見てくださった、との思いを忘れることができない。

第4章「エリクソンに学ぶ」は、エリクソンの、これまで語られてこなかった部分に触れるものだった。どんな立派な人でも、皆それぞれの重荷を背負っている、だからこそ社会に返していこうと歩み続けることを知らされた。

第5章「戦争・歴史・歩み」の中で、津守先生は「流されずに生きる」と題し、先生が歩んで来られ

た道のりが語られる。息次ぐ間もなく読み入る。

そして、第6章「保育と平和」では、OME P（アジア太平洋地域幼児教育・保育国際会議）を通じて津守先生が世界平和へ向けてされたことへと話題が広がっていく。横浜を会場としてOME P世界大会が開かれた。津守先生は会長と大会準備委員長も兼務された。「参りました、世界中からファックスが来て夜中じゅう。休む部屋に電話機をおいたのがねえ」。これが一九九五（平成7）年であった。

ここで、私の記憶は、そこからちょうど十年前にさかのぼり、私も立ち会ったある出来事に至る。つまりこのOME P世界大会に先立って一九八五年には、日米欧幼児教育・保育会議が日比谷公会堂を会場にしてフランス、スウェーデン、アメリカ、西ドイツから代表者を招き、シムボジウムが行われた。これこそ当時の東京都私立幼稚園連合会が中心となり、文部省（現文部科学省）、厚生省の枠を超えて公私、幼保の組織の方々の協力でなした会合であつ

た。そこでは「就学を五歳に」という経済界からの声の中、「六歳がやはりふさわしい」という各国の、また日本の実情が話し合われた。子どもが「ゆつくり大きくなる」ことを保障しようとする趣旨であったと記憶している（参加者はOMEPPのグタール総裁、チューリッヒ大学のデュバルク教授、アメリカのバーガーIACEI副総裁、スウェーデンのシル女史、ドイツのモスカル女史など）。

津守先生と松村康平先生（元お茶の水女子大学教授）がここに大きくかわっておられたが、その当日、日比谷公会堂の鍵をあける仕事までなさっておられたことには驚かされた。保育学を支えるということは、ここから始まるのだと思ひ知らされ、深い感動と共に忘れられない。

第7章「保育が目指すもの」では「高尚な精神を育てる教育」を津守先生が語り、浜口さんが「地を這うことと高尚さとの間に」と題して応答される。

津守先生は「子どもの心には、高みの光へと向かう

心がある。それを高尚な精神へと育てるのが教育の力であろう。そこから本式の教育が始まる」と言う。

そして、それを担っているのが大人であると。こうした文章に触れながら、津守先生の世界に入っていくと、先生が一人の時、聖書を開いておられるお姿が感じられる。保育を学び、そしてそれによって癒されるのは深い信仰心をおもちだから。近づきたいと思う。

本書は、開いたどこの頁からも読み始めることができ、いつの間にか津守ワールドに入っている。それを助けてくれるのが、各章で津守先生の文章に応答文を書かれている専門の方々である（友定啓子、宮里暁美、西原彰宏、井原成男、柴崎正行、大戸美也子、浜口順子各先生方）。

保育の原点を爽やかな風によって案内してもらえそう。緑陰で開くにお勧めする一冊である。

（東京家政学院大学非常勤講師）